

審査の結果の要旨

氏名 大久保教宏

大久保教宏氏の「国境を越える使命——メキシコ革命とプロテスタンティズム」は1910年に始まるメキシコ革命において、プロテスタントが果たした役割に注目し、宗教とナショナリズムの交錯する思想状況を描き出した宗教＝政治思想史の試みである。

カトリック国であることが自明とされ、従来の研究では軽んじられてきたが、実はメキシコ思想史の重要な転換点において、短期間ながらプロテスタントがたいへん重要な役割を果たした。アメリカ合衆国で当時広まった社会的福音や教育への情熱がメキシコにも及び、新興の中産階級からプロテスタントの教育指導者や社会改革運動家が多数輩出する。彼らは革命政権に関わりつつ、政治的社会的行動によって自らの宗教的ビジョンを実現していこうとする。カトリック教会と世俗主義が対立してきたメキシコにおいて、第三の立場として宗教的な社会改革者であるプロテスタント知識人に大きな活躍の場が開けてくる。

大久保氏はこの知識人群の思想を、ジャン・ジャック・ルソーやロバート・ベラーが近代社会の新しい宗教性のあり方として概念化した「市民宗教」の語を用いて記述し、その多様性や時期による変容を明らかにしていこうとする。市民道徳の鼓吹をカトリシズムと結びつけるに至ったバスコンセロスと対比しながら、20世紀初頭のアメリカ合衆国とラテンアメリカのプロテスタントの交流の経過が描き出された後、プロテスタントの超党派雑誌『キリスト教世界』や禁酒運動が果たした役割が分析される。とくに、エピグメニオ・ベラスコ、アンドレス・オスーナ、モイエス・サエンスらのプロテスタント社会改革者の思想と行動の軌跡が丁寧に示され、その特徴が分析される。こうして、主として1910年代、20年代の市民宗教の動向が、また宗教とナショナリズムの交錯の種々相が明らかにされ、プロテスタント色をもつ市民宗教がこの時期、花開き、やがて後退していったのは、国家と教会の二元的対立のはざまが広がり、第三の道が期待されたからだとされる。

先行研究との関係づけが十分でなく、理論的な洗練の余地があるとはいえ、一次資料を綿密に調べながら人物像やその思想に肉薄し、ある時代の宗教思想史の、軽視されてきた重要な一局面を濃密に活写しえている。

よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。